

一、はじめに

「お願いします」は、日本人の日常生活においても、日本語学習者の会話においても、頻出するフレーズである。例えば、典型的な自己紹介は「はじめまして」に始まり、「どうぞよろしくお願いします」で締めくくられるのが定番である。

また、この表現は、依頼の意味を実現する時に使われることが知られている。以下のような例である。

- (1) 「赤い羽根募金にご協力をお願いします¹」
- (2) 「使用後はご返却下さるようお願いします」

このような依頼を表す「お願いします」は話し言葉としてだけでなく、手紙文やメール、社内文書などの文章語としてもよく使われる。しかし、依頼を表す「お願いします」に関して記述した研究は少なく、学習者の誤用も少なからず見られる²。本稿では、この依頼表現として使われる「お願いします」に注目し、その場合の形態・構文的特徴と、用法を整理することを目的とする。

二、先行研究と問題の所在

日常生活において、依頼を表す「お願いします」が使われる頻度は少ない。柏崎（1993：p6-7）は、一定の資料内から収集した依頼表現の用例数をあげている。それによると同一の資料内から、「お～ください」117例、「～てください」404例、「～てくれ」165例、「～て」353例、「～てくださる／～てくれる」の疑問・否定疑問形70例、依頼を表す動詞77例、「～てちょうだい」64例、話し手の意志・願望56例、「～てもらおう」「～ていただく」の疑問・否定疑問系25例が収集されている。「お願いします」は依頼を表す動詞である。柏崎の挙げた「依頼を表す動詞」の77例中には、「お願いします」だけでなく、「頼む」「依頼する」も含まれるが、それにしても、他の依頼表現に比べてけっして少ないとは言えない出現数がある。

しかし、依頼を表す「お願いします」について記述した先行研究は多いとは言えない。モダリティの研究や依頼・命令表現の研究において、紹介されることはあるのだが、他の依頼表現「してくれ」、「してください」、「してくれないか」等に比べると注目を浴びることが少なく、「お願いします」に的

¹ 用例について、出典のあるものは用例末に略号を示し、論文末に用例の出典を記載する。用例の略号がないものは作例である。

² 「印鑑を持ってきてお願いします」のような接続上の誤用例が多い。正しくは「印鑑をお願いします」「印鑑を持ってくるようお願いします」等。

をしぼって具体的な用法を記述したものは管見ではない。命令表現、依頼表現を整理する中で、「お願いします」に触れた代表的な研究としては、仁田（1990）、森山（2000）がある。

仁田（1990：p260-261）は、働きかけの文（いわゆる命令の文）を整理する中で「言語活動を表す動詞による」働きかけとして、「命じる」「願う」「頼む」を指摘し、相手が二人称であり、遂行動詞が非過去形である場合、働きかけの力を持つと述べている。

森山（2000：p76-77）もまた、命令表現を整理する中で、「遂行動詞系による命令表現」として「命ずる」「頼む」「お願いします」をあげている。森山は、「お願いする」について、「謙譲語のない形の「願う」だけでは依頼の意味をもたず、敬語形態と共起することによって、命令の遂行動詞という意味を表す」とも述べている。しかし、森山の記述に反し、実際には謙譲語のない「願います」の例も珍しくない。「お静かに願います」などの例である。おそらく、森山が言いたかったのは謙譲語も丁寧体もない原形の「願う」だけでは依頼の意味を持つことが少ないということかと推察する。

(3) ご協力をお願いします→？協力を願う

しかし、この例にしても社長から社員へ向けられた以下のような場面を考えれば、ありえないとは言えない。

(4) 「今月こそは売り上げ目標を達成したい！ぜひみんなの協力を願う！」

「お願いします」が依頼を表す場合について記述した文献は、上記のように例や条件を記述したものが見られるが、まだ検討の余地がありそうである。三節において後述するが、「お願いします」の依頼の機能は、文単位、あるいはもっと大きな談話単位で生じる条件付きのものである。そのため、動詞命令形など、形態を分類の中心とした従来の文法研究では扱われることが少なかったのであろう。

一方で、「お願いします」を依頼表現の典型と捉える研究もある。熊取谷（1995）、林（2000）などの、依頼の談話構造に関する研究では、「お願いします」は、典型的な依頼表現と捉えられている。熊取谷（1995：p16）には、「多くの母語話者は、「～下さい」および「～お願いします」を間接「依頼」ではなく、典型的な直接「依頼」の表現とみなすであろう。従って、ここではこれら典型表現は、遂行表現とほぼ等価な直接表現と見なすことにする。」という記述がある。また、林（2000：p82-83）は、ドイツ語と日本語の依頼と断りの談話構造を対照するにあたって、「お願いします」を日本語におけ

る典型的な依頼表現としてあげている。ただし、これらの研究は、依頼の談話のプロセスを分析するものであり、「お願いします」自体の用法に関する具体的な記述ではない。

以上に見たように、依頼表現として使われる「お願いします」の実際の使用例は少なくないが、これに関する文献は少なく、とりあげられたとしても例の紹介程度にとどまったり、説明なしに「典型的な依頼」と位置づけられたりしている。記述されてきたことも、すべてが正しいとは言えないようである。

以上を踏まえて、本稿では、以下の3点の問題について、考察していきたい。

- ①「お願いします」は典型的な依頼表現かどうか。
- ②依頼を表す「お願いします」は、どのような条件で依頼を実現するか。
- ③「お願いします」による依頼の特徴は何か。

三、依頼表現における「お願いします」の位置づけ

(一) 依頼表現の概観

本稿で扱う「お願いします」が、典型的な依頼表現かどうかということをも明らかにするには、まず、他の依頼表現も紹介する必要がある。「依頼」は、形式を重視した伝統的文法論の立場をとるか、意味を重視した語用論等の立場をとるかによって、その定義や範囲が異なってくる。本稿ではまず文法的な立場で「依頼」を説明する。

文法的な立場では、依頼は命令の一種で、文法的性格は命令とあまり変わらないと考えられている。命令とは、動詞命令形³を述語に持つ文によって典型的に実現される意味で、聞き手にある行為の実現を促すものである。そして命令の中で、複合動詞「してくれる」の命令形「してくれ」「してください」を述語に持つ文によって表現されるのが、依頼である。やりもらいの補助動詞「くれる」が話し手の利益を明示するため、依頼は、「話し手にとって利益のある行為を実現するよう、聞き手に働きかける」という意味となる。また、強制的なニュアンスを持つ命令に比べ、やさしく、話し手が下手に出る印象である。

(5)「待て」(命令)

(6)「待ってくれ」(依頼)

³ 動詞命令形とは「歩け」「食べろ」「放せ」のようなものである。「しなさい」は、敬体の動詞しなさるの命令形「しなされ」が音便化したもので、これも命令形に含まれる。

上の2例を比較すると、「依頼」の持つ話し手利益という特徴が解釈できるだろう。逃げる泥棒を追いかける場合は強制的な「待て」が用いられ、実家に帰ろうとする妻を止めようとする場合は、話し手利益で下手に出た「待ってくれ」が用いられる⁴。そして「してくれ」、「してください」のように、補助動詞「くれる」を構成要素にもつ動詞命令形、及びそこから省略と見られる「して」、「くれ」とほぼ同じ意味を表す「頂戴」と組み合わせられた「してちょうだい」が、文法上、典型的な依頼表現である。つまり、文法上典型的な依頼表現は、形式として補助動詞「くれる」の命令形を含むか、そこから派生してきたものということである。

(表1) 文法上典型的な依頼表現

してくれ・してください・してくれたまえ・お~ください して・してちょうだい
--

ただし、先ほど述べた「話し手にとっての利益」「命令よりやさしく、下手」といった依頼特有の意味特徴は、実際の使用の場面の中で薄れていくことも、しばしばである。例えば、以下のような例は、命令に近い意味を持つ。

(7) (テストの終了時、試験監督者が)「鉛筆を置いてください」

つまり、文法上、形式的に典型的な依頼表現であっても、意味的には、依頼からずれていくことがある。

ところで、上記(表1)で紹介したもののほか、一般に「依頼表現」と言った場合、以下のような表現も含まれる。これらは、文法的な「依頼」の形式とほぼ同じ「依頼」の意味を実現するからである。ただし、これらは形式的には動詞命令形ではない。その出自は、命令文ではなく、問いかけ文、述べ立て文など、本来は、他のモダリティを表す文に属するが、慣用的に依頼とほぼ同じ意味を表すというものである。

(表2) 慣用的な依頼表現

してくれないか・してくれるか・してもらえないか・してもらえるか してほしい・してもらいたい・していただきたい してくれるとうれしい・してくれたらありがたい してもらいたいんだけど・してほしいんだけど
--

⁴ ただし、依頼表現のうち敬体の「してください」は頻繁に使われるため、話し手利益の特徴が薄れ、丁寧な命令に近づく例も多い。

していただきたいんですが等

例えば「してもらいたい」は願望の述べ立て文、「してくれないか」は問いかけ文である。これを述語とする文全体は、動作主体の人称等の一定の統語的・形態的条件を満たして、初めて依頼の力を実現する。しかし、これらの表現は「依頼」の例として多く使われるうちに、固定化、慣用化が起き、「依頼表現」とみなされるようになっていく。

ところが、この慣用化という言い方は曖昧であって、どこまでを依頼表現と捉えるかについての明確な基準はない。母語話者であれば、「してくれませんか」、「してもらえませんか」は「依頼」の意味でよく使われるが、「していただくと嬉しいです」「してくれたら幸いです」「してもらいたいんですけど」では、依頼表現としての固定性が弱いことがわかるであろう。しかし、固定度の高い「してくれないか」であっても、「もしかして、助けてくれたりは、しませんか」のように、分割した場合、とたんに授受表現の「くれたり」や、疑問の「しませんか」が、もともとの要素としての意味を發揮しはじめ、依頼の慣用表現らしさは、薄れてしまうのである。つまり、(表1)で挙げた文法的に典型的な依頼表現以外の「依頼表現」は、どこまでをその範囲とすべきか、形式からは規定しにくいのである。そこで、語用論等の立場では、以下のような条件が示され、それを満たす場合、「依頼」の意味が実現するとされている。

(表3) 山岡・李 (2004) による依頼の語用論的条件⁵

- ・ 命題内容が表す行為は、聞き手にとって実行可能
- ・ 通常の自体の進行において聞き手が行為 A を実行することは自明のことではない
- ・ 話し手は命題内容の実現を欲している
- ・ 行為 A の実行は話し手に利益をもたらす

さて、本稿で扱う「お願いします」に戻る。「お願いします」は、いわゆる動詞命令形ではなく、文法的に典型的な依頼ではない。モダリティによる文の分類では述べ立て文に属する。それが、「願う」という動詞の語彙的意味や、形態・構文的条件に依存して依頼の意味を得ている。次節では、「お願いします」が依頼を表すための、形態・統語的特徴に基づいて、考察する。

⁵ これは、サール(1986)の発語内行為「依頼」の規則(p124)に基づいたものである。

(二) 依頼を表すための基本的条件

次に、「お願いします」が依頼を表す場合の基本的条件について検討する。

「お願いします」は、遂行動詞「願う」の謙讓形丁寧体である。「お願いします」の他、「願います」「お願い致します」「お願い申し上げます」（及びこれらの平仮名表記）のようなバリエーションがあり、さらに「お願いをする」「お願いをいたします」のように助詞の「を」が挿入されるものも、ほぼ同じ意味を表す。本論文では、便宜的にこれらを総称して「お願いします」と呼ぶ。

遂行動詞を述語に持つ文は、ある形態・構文的条件を満たすと「ある行為を叙述することによって、その行為を行う」という特別な力を持つ。以下のような例である。

(8) 安倍晋三君を、総理大臣に任命する。

この例は、「任命する」と述べることによって、「任命する」という行為自体を体現する。「お願いします」の場合、原形の動詞は「願う」であり、元来の意味は「神仏に自分の希望するところをこいねがう」ことである。しかし現代語では、人を相手に発話されることが圧倒的に多く、相手にとって実現可能な行為を相手の目の前で願うことにより、「相手にその行為実現を頼む」という意味へと変質している。例えば以下の例は、依頼の形式「赤い羽根募金に協力してください」と、ほぼ同じ意味である。

(9) 赤い羽根募金にご協力をお願いします。(1) 再掲

なお、森山(2000)の指摘にもあるように、原形「願う」の用例はほとんど見られず、聞き手への配慮や謙讓の気持ちを伝える丁寧体「お願いします」や、丁寧体謙讓体「お願いいたします」などの例がほとんどを占める。これは、人を相手に発話され、聞き手の好意による行為の実現を期待するという「お願いします」の特徴から考えれば必然的であろう。ただし、謙讓語ではない丁寧体の「願います」の用例はいくつか見られる。これは次節で紹介する。

さて「お願いします」を述語とする文は、すべてが依頼の意味になるわけではない。仁田(1991)にもいくつか条件が記述されていたが、さらに詳しく見てみると、以下のような条件のもとでのみ遂行の力を持つ。

(表4)「お願いします」が依頼の意味を持つ条件

- ① 「お願いします」という発話の主体が1人称である。
- ② 依頼された行為の動作主体は2人称である。
- ③ 遂行動詞が非過去形・丁寧体のシマスである
- ④ 文末にダロウ・ノダ・カモシレナイなど判断の成分を伴わない

上の条件に反する以下のような例は、遂行的な力を持たない。

- (10) 山田君が、佐藤さんに、仕事をお願いした。
- (11) 「この仕事、明日までに頼みたいんですけど」
「すみませんが、今週ちょっと忙しいんです」
「じゃあ、他の人にお願いします」
- (12) 困った時には、お母さんにお願いすればいいだろう。

(10) は条件①②③に反する。行為の主体は3人称の「山田君」であり、依頼された行為の動作主は3人称の「佐藤さん」である。また、テンスが過去形である。(11) は条件②に反する。2人称ではなく3人称の「他の人」が動作主である。(12) は条件②④に反する。動作主体は、3人称の「お母さん」であり、文末にダロウが後続している。

①②の人称制限について補足すると「お願いします」による依頼の文は、下の(13)のような二重構造になっている。ただし、発話行為の主体である話し手も、動作Vの主体である聞き手も、通常は顕示されない。顕示すると(14)のように余剰的な印象の発話となる。

- (13) 【(話し手が) [(聞き手に) V するよう] お願いします】
- (14) 私が、皆さんに、来週このテキストを持ってくるようお願いします。

上の文の「私が」「皆さんに」は、発話の状況から自明なので、顕在しない方が自然である。

次に③④の文末の表現についても補足する。遂行動詞が遂行の力を持つには、文末が「～します」という言い切りの形で現れることが必要である。ダロウ、カモシレナイなどを伴うと、話し手の意図があやふやになり、遂行の力が失われてしまう。つまり、「お願いします」を述語とする文は、上記(表4)の条件を満たさない場合には遂行的な力を持たない。

四、用例に基づく分析

(一) 用例の概観

次に「CD-ROM 版 新潮文庫の 100 冊」を元に、小説の会話文及び手紙文中に現れた「お願いします」の用例を共起する成分によって整理する。⁶「お願いします」がどんな構造で現れ、それぞれどのくらいの数の用例が見られるのかを明らかにするためである。紙幅の都合上、上の三節（表 4）の条件を満たすもののみを紹介する。

（表 5）「お願いします」の出現—構文的特徴による分類—

	す お 願 い し ま	願 い ま す	ま す お 願 い 致 し	上 げ ま す お 願 い 申 し
(A) 単独	23	1	3	0
(B) 副詞（ぜひ・どうぞ・よろしく）＋お願いします	15	7	13	0
(C) N を（φ・は）＋お願いします	18	7	2	0
(D) V よう（に）＋お願いします	4	2	2	2
(E) 修飾成分（早く・穏便に）＋お願いします	2	2	1	0
(F) 複合動詞化（お待ち願います等）	0	12	0	0

(A) は、「お願いします」という動詞のみで一文を成す例、(B) は「ぜひお願いします」「よろしく願います」のように副詞のみを伴う例である。実は (A) (B) では、聞き手の行う動作が文の中には顕在しないため、上記の（表 4）の②の条件を満たしているかどうか判断が難しい。ただし前後の文脈から、話し手が聞き手になんらかの動作を促していると解釈できるものをここに分類した。

なお、副詞は (C) (D) の条件とも共起することがあるが、(B) では副詞のみが現れ具体的な依頼の内容が現れないもののみを数えた。

⁶ 依頼表現は話し言葉（手紙文、メール等でも現れる）に特有なものであるため、このような用例分析には、話し言葉のコーパスや、実際の話し言葉から収集したデータを利用すべきとの考えも当然ある。しかし、ここでは小説内の会話文及び手紙文中に現れる例を、便宜的に利用する。理由は、自然な依頼の会話をあらゆる場面（年齢、状況）において収集することが困難であること、アンケートによってデータを収集するにしても偏りが避けられないこと、前後の文脈等考慮しなければならない点が多いためである。実際の会話や書信で現れる例に基づく分析については、今後の課題としたい。

(C) の「N を (φ・は) + お願いします」には、名詞の目的語を伴う例のほか、「ビールお願いします」のように助辞の「を」が省略されたものと、「後をお願いします」のように「N は」の形で目的語が取り立てられた例も含めた。(D) は「V ようにお願いします」のように動詞に後続する例である。

(E) は、形容詞連用形等によって修飾された例であり、これも (C) (D) と共起することがあるが、(E) では修飾成分のみが現れる例を数えた。(F) は「お待ち願います」「ご協力願います」のように複合動詞化した例である。なお表の用例数には、平仮名表記の例も含む。

全体の用例数が多いのは (A) 単独で現れる例と、(B) 副詞のみを伴う例である。(C) 目的語 N をとる例も多い。一方、(D) 「V よう (に) お願いします」という例は多くない。この特徴は重要である。本来、命令・依頼表現は動詞を核とし、その動作の実現を求めるものであるからである。動詞が命令・依頼表現の中心であることは、命令形が動詞にしか見られないことから明らかである。分析元のデータが限られているので完全に一般化はできないが、ここでの結果は、「お願いします」による依頼が、依頼表現における典型ではなく、特殊なものであることを示唆する。

次に、異形態ごとの差を見ると、「お願いします」は、「願います」「お願いいたします」に比べると、(A) 単独で現れることが多い。また全体の用例数も多い。「願います」では (F) 複合動詞化した形が目立って多い。「お願いいたします」は、(B) 「どうぞ」「よろしく」などの副詞を伴う例が多い。

「お願い申し上げます」では、動詞に後続する (D) の例のみが見られた。

次に用例を元に分析を行う。なお、この節では、用例数の分布を見るために、「CD-ROM 版 新潮文庫の 100 冊」内の用例数をあげたが、以下の分析では、この他、小説の会話文から収集した用例も使用する。出典は、用例末に明記し、論文末に一覧を載せる。

(二) (A) 単独の「お願いします」

以下の例を見ると、単独の「お願いします」は、依頼表現とは言いがたい。話し手が何かを望む気持ちを明示、表現しているだけである。しかし、そこから発展して、依頼の談話構造の中で「依頼の意図の強調」として使われるものや、「相手の動作のきっかけ」や「相手の意向や勧誘への同意」を示すものが見られる。以下に例を紹介する。まず「依頼の意図の強調」の例をあげる。

- (15) 「(略) けれども今度だけは、どうしてもお会いして御相談しなくてはならないのです。手紙では書けないような事です。すみませんが六日の午後五時ごろ、いつもの喫茶店まで来て下さい。お願いします。

- この問題が解決しなければ、私は破滅です。(略)」（新潮・石川）⁷
- (16) 「警察はまずいんです」と私は言った。「僕の方も悪かったし、傷も辛い深くはないし、内内で済ませたいんですよ。お願いします」（新潮・村上）
- (17) 「済まねえが、金を少し貸しておくんなさい、小舟町には二十両とちよっと預けてあるんです、いや」栄二は和助に反対する隙を与えずに云った、「なんにも云わねえで、いまはなんにも云わねえで貸しておくんなさい、頼みます、お願いします」（新潮・山本周五郎）

このように、他の依頼の文や願望の文に後続し、何かを望み、頼む気持ちを強調する例が多く見られる。このような「お願いします」は、単に話し手の願望の気持ちを述べる文であって、依頼の文とは言いがたい。具体的な依頼は先行部分にすでに現れており、「お願いします」では依頼の具体的内容が示されていないためである。また、「Vするようお願いします」や「Nをお願いします」が省略されたものとも考えにくい。むしろVやNを補うと重複的で不自然になる。

次に「相手の動作のきっかけ」の例をあげる。

- (18) 「先生、お願いします」もとに言われて吟子は目を開いた。少年は大人しく丸椅子に腰かけ、すえは額に手を当て頭を垂れていた。眼はまだ完全な失明とは断定できなかった。「なんとか失明することだけは防げるかもしれません」（新潮・渡辺）

これは、行動を促すときに使われる「どうぞ」に近い。「どうぞ」は目上から目下の印象があるが、「お願いします」は目下から目上の印象がある。場面から「診察してください」に近い意味であることがわかるが、場面の助けがなければ、依頼の内容がわからない。

次は「相手の意向や勧誘への同意を示す」例である。多くの場合、感謝の気持ちも伴う。

- (19) 「尾島産業の方は心配しなくていい。私が決して無茶はさせない」
「お願いします」（新潮・赤川）

このように、「お願いします」が単独で現れる場合には、依頼の内容とな

⁷ 用例出典のうち、「CD-ROM版新潮文庫の100冊」によるものは、(新潮・作家の姓)で示す。その他の用例は、作品名の略号を示し、論文末に一覧を載せる。

る行為が文内部に示されていないので、具体的にどんな依頼がなされているのかは、前後の文脈を見なければわからない。その点で「してください」等による典型的な依頼（聞き手に具体的行為をうながす）と異なる。文脈や場面から、聞き手になんらかの行為をうながしているように見えるものもあるが、それは、あくまで文脈に依存した語用論的なものと考えられる。

(三) (B) 副詞＋お願いします

ここで扱うのは「ぜひ」「そろそろ」「よろしく」などの副詞を伴う「お願いします」の例である。用法は、前述の(A)とほぼ同じである。「話し手の願望の気持ちの明示」が基本であり、「依頼の意図の強調」、「相手の動作のきっかけ」「相手の意向や勧誘への同意」などの発展的意味を表す。

下は「動作のきっかけ」の例である。

- (20) 堀畑の五、六ラウンドのウォーム・アップが終わり、「そろそろお願いします」という山神ジムの会長の声がかかった。リングの上でそれぞれの練習をしていた金子ジムのボクサーたちはそこからおり、かわりに内藤と堀畑が上がった。重量級の二人が立つと、急にリングは狭くなった。スパーリングが開始される直前、山神ジムの会長は堀畑の肩を叩き、そして言った。「思い切りぶつかってこい！」(新潮・沢木)

以下は「同意」の例である。

- (21) 「梶谷という男です。いま、ここにいるはずですから呼びましょうか？」
「ぜひ、お願いします」(新潮・松本)
- (22) 「今日中になんとか連絡を取って、その結果を明日の午前中までに電話でお知らせします。細かいところは、そのあとで文化放送や柳さんたちと会って決めるといいと思います。明日、午前十一時半から十二時まで、ホテルの部屋で待っていてください。その間に、必ず電話をします」「よろしくお願いします」(新潮・沢木)

副詞の中で、特に「よろしく」が共起する例が目立って多い。以下のような例では、全体で挨拶言葉と化しているように見える。

- (23) 「ことは、社にいれてもらって、真面目にやりますから、よろしくおねがいします」(新潮・立原)

- (24) 「さてと、僕は君より二つ年上だ。少しいばることあるかも知れないけど、怒るなよな、先輩なんだから」「よろしくお願いします」（新潮・曾野）

「よろしく」が共起する例は、自分の望むことも、相手が何をするかも明言しないので、聞き手の解釈に幅を持たせるような曖昧さを持つ。以下の例のように、様々な内容を含意することがある。

- (25) 加藤は、彼の眼が小屋の暗さに馴れない前に挨拶だけはさきにやった。よろしくお願いしますという言葉のなかには、いろいろの意味を含めていた。みんなのパーティーに入れてくれという希望もあったし、この小屋に泊めてくれという願いもあった。（新潮・新田）

副詞を伴う「お願いします」も、単独の例と同様、具体的な動作の指示は表さない。これも、依頼表現ではなく、話し手の願望の態度を表明する文であると考えられる。

(四) (C) Nを(は、 ϕ) + お願いします

「Nをお願いします」のように目的語をとる例の場合、名詞のN部分には、動作性名詞（拍手、協力等）あるいは、モノ名詞（救急車、ビール等）、ヒト名詞（あの子、社長等）が現れる。動作性名詞の例の場合、その動作をするよう求める。モノ名詞の例はそのモノを要求する。ヒト名詞の例はその人が来ること、電話に出ること、あるいは、その人をお世話すること等を要求する。「Nは」の形でNが取り立てられたり、「Nを」の「を」が省略されたりすることがある。

まず動作性名詞の例をあげる。

- (26) 「そして……ケーキ・カット、終わりました。拍手をお願いします」（傍若無人）
- (27) しかしその女性はべつに何事も告げずに、左手に持っていた書類を私の目の前にひろげ、ボールペンを渡しながら「ここにサインをお願いします」と言った。（岳物語）
- (28) 「それでは、勤労奉仕団員の壮途を送るため、万歳三唱をお願いします」（新潮・井伏）
- (29) そして、つぎに述べさせてもらうことは、もっとも申しあげにくい話ですが、いま述べたことに関連しているので、これもどうか冷静な御判断をおねがい申しあげます。（新潮・立原）

N部分に現れる名詞は、拍手、協力、サインなど「Nする」という動詞を作ることができる名詞である。この場合「Nをお願いします」は「Nしてください」とほぼ同じ意味となるが、両者を比べてみると「お願いします」の例の方が、「してください」に比べて、やや丁寧な印象となる。(26)を「拍手をしてください」、(27)を「ここにサインをしてください」に言い換えると、より強制的な印象になる。また(29)のように、敬語を使用したものを以下のように「してください」に言い換えると敬意の差が感じられる。

(30)「これもどうか、冷静に判断をしてください」

「お願いします」は、もともと願望を表す遂行文であり、相手への強制力は「してください」に比べると間接的である。一方、「してください」は、動詞命令形を述語とする命令文の一種であり、「お願いします」に比べると発話者が聞き手に指示するという意味合いが強くなるためだろう。

次に、モノを要求する例をあげる。

(31)「それからお所とお名前をこれへ一つお願い致します」金を払うと番頭は別の帳面を出して来てこう云った。(新潮・志賀)

(32)「さあ、密室の鍵を解こうか？ それとも、お寿司でも食べる？」

「そんなら、お寿司おねがいします。小菊、お腹ペコペコですねン」(京舞妓)

ここでの「Nをお願いします」は「Nが欲しい」という意味を表現している。それぞれ「所と名前を書くこと」「お寿司をとること」を要求しているが、「書く」「とる」という動詞を言わなくても、聞き手に、その意図が通じる。

しかし、実は上記のような例も、文脈や場面に依存して、依頼の意味を実現している。Nをどうするかは言及されていないので、聞き手が依頼内容を、想像して補う必要がある。(31)の例は、旅館にチェックインする場面や、帳面などの状況が揃わなければ、意図が理解されないだろう。また、例えば「電話をお願いします」という文を文脈から切り離して考えると、「電話を取ることを依頼しているとも「電話をかけること」を依頼しているとも解釈できる。通常、上記のような例では、文脈や常識からどんな動作を要求しているかがわかるが、動作が明示されない点が、動詞命令形を述語に持つ依頼の「してください」等と異なる。

次はヒト名詞を伴う例である。以下の例は、それぞれ「お医者さんと呼ぶ

こと」「子供の世話をすること」、「宮の面倒をみること」を要求している。

- (33) 「どなたか、お医者さんを、お願いします」(見事な)
(34) 「ちょっと子供をお願いします」(新潮・井伏)
(35) 「宮をお見捨てして逝くのが辛い。私の亡いあとも、宮をお願いします」(新潮・田辺)

(34) (35) 例では、聞き手に具体的に何をお願いしているのか曖昧である。子供や宮をどうするかという具体的な行動は指示されず、曖昧に世話をすることを依頼している。先に述べた挨拶的な「よろしくお願いします」同様、曖昧に何かを頼み、具体的な行動の内容の解釈は聞き手にまかせるものである。

ここに見てきたように「N+お願いします」という構文は、(A) (B) に比べ依頼の意味が明確である。特に動作性名詞が前接する例は、「してください」の文とよく似た意味を表す。一方で、モノ名詞、ヒト名詞を持つ場合、相手に具体的な行為の指示をしないため、依頼された内容に曖昧さを持つことがある。

(五) (D) V よう (に) お願いします

次に「V よう (に) お願いします」の例を見てみよう。この形は、動詞Vにより聞き手の行為が明示されているので、典型的な遂行文の構文と思われる。しかし、実例は前述の (A) ~ (C) に比べてあまり多くない。「お願いします」のほか「お願いいたします」「お願い申し上げます」のようなバリエーションが見られる。

- (36) 「それから、奥さんには、しばらくこの病院にはいらっしやらないようにお願いします」(新潮・立原)
(37) 〈大畑様。桑田伸子前社長にぜひいい職場なり、男性なりをご紹介下さいますようお願い申し上げます。尾島産業有志〉(新潮・赤川)
(38) 御努力によって、この困難な事件が一日も早く解決するようお祈り申しあげております。そのうえでお体がお暇になりましたら、ぜひ九州にお遊びにおいでくださるようお願いいたします。(新潮・松本)
(39) 「部長さん、失礼かもしれませんが」と田代さんは云った。「私の会社の希望する点を、率直に申し上げます。会議は会議として進行して頂いて、臨機の手段をとって頂くようお願いいたします。宇品の貯炭に手をつけることが厳禁でしたら、非常時中の超非常時ですから、取敢ず宇部炭鉱へ誰か派遣されたらいかがです。今、すぐに派遣されたら、夕

- 方までには炭鉱へ着かれるでしょう。広島市内の統制会社の復旧は、当分のうち見込がないんじゃないでしょうか」(新潮・井伏)
- (40)「私は必ず完成してみせます。いままでも、計画したことはすべてやりとげております。それが設立できた時には、ぜひ社長になっていただくよう、お願いいたします」(新潮・星)
- (41)「これからお話しする研究結果は、ほんのつまらないもので皆様の貴重なお時間を潰すかと思うと誠に申し訳なく思うのですが、今回はちょうど私の話す順番になっておりますので、甚だ恐縮ではございますが、しばらくの間ご辛抱なさって下さいますようお願い申し上げます」(新潮・藤原)

動詞部分は、「くださる」「いただく」というやりもらいの複合動詞、もしくは敬語であることが多い。この表現は「してください」に類似した意味を表すが、「してください」より丁寧であり、フォーマルである。例えば、直後の動作を働きかける「待ってください」を、「お待ちくださるようお願い申し上げます」に言い換えると、デパートの店員が大勢の客に向けて、アナウンスしているような、懇懇で、形式的な印象となる。また、この形は手紙文中や、複数の人々に向けた依頼に、多く見られるが、これもそのフォーマルさという特徴ゆえだろう。(37)(38)は手紙文である。(41)は、複数の聞き手に向けて、依頼を行っている。

ところで、(表5)で見たように、動詞が共起する「お願いします」の例は、単独の例や、名詞と共起する例に比べ、多くない。典型的な命令・依頼の形式は、(表1)(表2)で見たように、動詞を中心とした形式である。そして、その動詞によって表される動作の実現を求めるものである。これに対し、「お願いします」では、動詞を伴わない例が多いことは、大きな特徴である。

ただし、「Vくださいますよう、お願い申しあげます」という文は、ビジネス文書で用いられる依頼の決まり表現であり、ジャンルによっては頻繁に現れることが予想される。

(六) (E) 修飾成分+お願いします

下は、修飾部分が働きかけの焦点となっているものである。形容詞連用形、動詞連用形、あるいは「名詞+に」で、状況(どのように)を修飾する例が見られた。「早くお願いします」「穏便にお願いします」「内密にお願いします」「急いでお願いします」等である。用例は多くなく、実際の依頼の内容は前後の文脈がなければわからない。(C)や(D)の省略とも考えられる。

- (42) 「ゆんべ、二人死にました。なるべく早くお願いします」 (新潮・井伏)
- (43) 「わかりません。いや、そんなはずはありません。こんな事件をおこすなど、考えられないことです。……なにぶん、家にいないことが多いものでして。ひとつ、穏便に、おねがいたします」 (新潮・立原)
- (44) 「ぎりぎりの所ではじき出した価格です。見積り通りにぜひお願いいたします。真剣にお願いしておるのです。仰言るような数字では、利益どころか欠損してしまいます」 (新潮・吉村)
- (45) 「みなさん、ちょっとお静かにねがいますよ。オンリー一発行きますから」 (銀ちゃん)
- (46) 「私、田舎では、配送のアルバイトをしていました。田舎道ですから、東京なんかよりずっとスピードをだすんです。トラックなんかも多くて、トラックは女の運転手と見るとバカにしますから、こっちも負けずに、追い越しをかけたして」
「すごいね。しかし、いまは、お手やわらかに願いますよ」 (悪女は四本のバラ)
- (47) 「行くとすれば、こちらの女性は？」
「ご一緒に願います」
「奥さん、お聞きのとおりだ。何の嫌疑か知らないが、行って誤解をとくしかないようですね」
「はい。わかりました」 (見知らぬ顔の女)

例えば (45) の場合「静かにすること」(46) の場合「お手やわらかにすること」が求められている。これらの例の「お願いします」を「してください」に言い換えても、ほぼ同じ意味を表す。代動詞のような役割である。しかし、実際の行為は、聞き手が推察するしかないので、「N (モノ名詞、ヒト名詞) をお願いします」同様、コンテキストに依存して、依頼の意味を表現している。

(七) (F) 複合動詞化した「V 願います」

下は複合動詞「～願います」の例である。「(お) + 動詞連用形 + 願います」あるいは「(ご) + 動作性名詞 + 願います」という形が見られる。

- (48) 「それではいくつかの点について、奥さんのお話をお聞かせ願います」 (公開株殺人事件)
- (49) 「なお、福岡方面のことで、小生でも役に立つようなことがございま

したら、いつでも御用をおおせつけ願います。できうるかぎり御協力いたします。」(新潮・松本)

- (50)「御起立ねがいます」という声がかかったので、一同がラジオのまえに直立した。幼い子供たちまで。(新潮・北)
- (51)「片倉義治さんですね。ちょっと聞きたいことがあるので署までご同行ねがいます」(深海の迷路)
- (52)「あなたの会社での立場もありますから、工藤さんにはお目にかかります。お話を聞いた上でご返事しますが、その際どういうことになるか、それはご了承願います」(風紋)

(48) (49) 例は、動詞連用形と複合化したもの、(50) ~ (52) 例は、動작성名詞と複合化したものである。

以下のように「ヲ格」が脱落したのか、複合動詞「～願います」なのかわからない例もある。

- (53) やがて局アナが腕時計を気にしながらカメラに向かって喋りはじめた。

「えー、これ裏ですね？ 確認願います。現在、これオンエアじゃないですね」(ガラスの遊園地)

上記の例は、それぞれ(49)であれば「おおせつけください」、(50)であれば「ご起立ください」とほぼ同じ意味を表す。その他の例も同様である。このように、複合動詞化した例においては、動作が明示されており依頼の内容は明確なので、先の(D)に近い用法である。「してください」に比べるとフォーマルで、格式ばった印象があり、(50)のように、複数の聞き手に向けた例が多いのも、(D)と同様である。

(八) 考察

最後に二節の問題提起であげた三点について考察し、まとめる。

まず、①の問題について述べる。熊取谷(1995)や林(2000)は、「願います」を典型的な依頼と述べているが、上述したように、「願います」は典型的な依頼表現とは言いがたい。「願います」による依頼の用法は、さまざまな条件を必要とする。具体的には、遂行動詞「願う」の語彙的な力(願望を表明)と、人称、文末の形式等の形態・構文的条件のほか、動詞に後続しない例では、前後の文脈や場面にも助けられて、依頼の意味を實現している。そして、依頼表現らしい用例は、動詞「願う」の用法全体から見れば、ごく一部に過ぎない。また、(表1)(表2)で見たように本来的

な依頼形式は、動詞を中心として発達している。一方、「お願いします」による依頼の文では、動詞を伴うものは少数である。多いのは、単独や副詞、名詞を伴う例である。したがって、「お願いします」による依頼は、典型的な依頼ではなく、むしろ周辺的な依頼と考えられる。熊取谷（1995）や林（2000）が「お願いします」を依頼の典型としたのは、依頼を表現する場合の意味的側面に注目したためであろう。

次に②の依頼を表す条件について述べる。「お願いします」が依頼を表すために最低限必要な形態・構文的条件については、三節の（表4）で提出した。しかし、四節の用例からは、この条件を満たしていても、依頼らしくないものが目立つことがわかった。

動詞や複合動詞化によって、依頼の内容が明確に示されている例は、「してください」と類似した用法であり、依頼表現と見なしてもよいと考える。ただし用例数は、名詞を伴う例や、単独で出現する例に比べて、あまり多くなく、ビジネス文書や複数の聞き手に向けた報告内での発話など、特定のジャンルに偏って用いられる。

単独で現れる例や、副詞のみを伴う例、形容詞連用形を伴う例では「お願いします」によって依頼される内容が曖昧であり、典型的依頼表現とは言いがたい。聞き手に何かを頼むモーダルな側面を強調するものである。特に「よろしくお願いします」という表現が頻出するが、これは挨拶言葉に近い。ただし、これらの例でも、前後の文脈や場面の助けとともに、談話全体で依頼を表現することがある。これは語用論的な依頼である。

名詞を伴う例は、名詞で示されたモノやヒト、事柄を要求するので、依頼表現に近い用法に見える。しかし、これらのうちモノやヒトを伴う例において、実際に何をするかは、前後の文脈や場面がなければわからない。したがって、これもかなりコンテクストに依存した語用論的要素の強い依頼である。

最後に③の「お願いします」による依頼の特徴について述べる。仁田（1991）、山岡・李（2004）などの先行研究によると、「お願いします」は遂行動詞による働きかけ文（命令や依頼の文）に位置づけられている。遂行動詞は、その動詞自体によって、どのような発話行為であるかを明言するので、一見、文脈からの独立性の高い文と思われる。しかし、その予想に反して、「お願いします」が依頼表現として働く時は、文脈の助けに依存しているものが多いことがわかった。これは「お願いします」がもともと願望の遂行動詞であって、依頼の遂行動詞ではないこととも関係しているだろう。しかし更に考えてみると、その他の依頼の遂行動詞「頼む」「依頼する」も、用例は多くない。そもそも、依頼とは、聞き手に配慮を行う命令であるのに、それを遂行文で行うことにもともと矛盾があるのだとも解釈できる。

上述したように「お願いします」による依頼は、文脈に依存することが多く、典型的とは言えない依頼表現であるが、逆に、そのことで便利な点もある。必ずしも動詞を使わなくてすむことや、曖昧さゆえに、婉曲に話し手の希望を伝えられることなどである。つまり、具体的な動作を省略することにより、より婉曲に、丁寧に、あるいは簡潔に依頼を表現することができる。フォーマルな場面、ビジネス場面や、文書などで「お願いします」がよく使われるが、これは、ポライトネスと関係があるように思われる。相手との関係性を損なわないために、依頼表現では、むしろ非典型的なものの需要が高い。そのことは(表2)で見たような、多くの慣用的な依頼表現が発展していることから見てとれる。「お願いします」は、「Vして下さるようお願い申し上げます」のように高い敬意を聞き手に伝えることができる。しかも丁寧にありながら、「してください」に近い強い要求性を備えているところに、その特徴があると考えられる。

五、おわりに

以上、「お願いします」が、依頼表現として使われる場合に注目し、その条件、用法を整理した。「お願いします」は遂行動詞の一種であり、これを述語とする文は、一定の条件のもとで、依頼の働きかけ文(してくれ・してください等)と同等の機能を持つことがあることがわかった。また、依頼を表す場合の特徴も明らかになった。

なお、「お願いします」は、スル形で言い切る遂行文の形で使われるだけでなく、「～をお願いしたいのですが」のような言いさしの形、「～をお願いできませんか」のような可能形の疑問文などで、さらに間接的な依頼の表現を派生させている。このような派生は、「してもらおう」「頼む」等とも平行した現象であり、興味深い。

(表6) 依頼表現の派生現象

基本形	お願いする	頼む	してもらおう
願望形式	お願いしたい	頼みたい	してもらいたい
勧誘形(意志)	お願いしよう	頼もう	してもらおう
可能形の疑問形式	お願いできますか	頼めますか	してもらえますか
可能形の否定疑問形式	お願いできませんか	頼めませんか	してもらえませんか

紙幅の都合上、これらの表現については、機会を改めて考察したいと考え

る。

参考文献

柏崎雅世 (1993) 『日本語における行為指示型表現の機能—「お~/~てください」「~てくれ」「~て」およびその疑問・否定疑問形について—』くろしお出版

仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房

森山卓郎・仁田義雄・工藤浩 (2000) 『モダリティ』岩波書店

Austin, J. L. 1962 *How to Do Things with Words*. Oxford University Press. (J.L. オースティン (1978) 『言語と行為』 坂本百大訳 大修館書店)

Searle, J. R. 1969 *Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language* *speech acts*. Cambridge University Press. (J.R. サール (1986) 『言語行為 言語哲学への試論』 坂本百大・土屋俊訳 勁草書房)

熊取谷哲夫 (1995) 「発話行為理論から見た依頼表現—発話行為から談話行動へ—」『日本語学』14 (10), 12-21. 明治書院

関口剛司 (2007) 「日本語による依頼表現の一考察—日台異文化間コミュニケーションの視点から—」『龍華科技大學學報』, 23, 龍華科技大學

林明子 (2000) 『会話展開の構造と修復のストラテジー—日独語対照の視点からみた「依頼」と「断り」におけるインタラクション—』『東京学芸大学紀要第2部門人文科学』, 51, 東京学芸大学

山岡政紀・李奇楠 (2004) 「依頼表現の日中対照研究」北京大学日本文化研究所・創価大学文学部編『日本語言文化研究』, 5, p131-160, 北京学苑出版

用例一覧

1. 『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』(1995) 新潮社

(収録作品: 赤川次郎『女社長に乾杯!』阿川弘之『山本五十六』芥川龍之介『羅生門・鼻』阿部公房『砂の女』有島武郎『小さき者へ・生れ出づる悩み』有吉佐和子『華岡清洲の妻』池波正太郎『剣客商売』石川淳『焼跡のイエス・処女懐胎』石川啄木『一握の砂・悲しき玩具』石川達三『青春の蹉跎』泉鏡花『歌行燈・高野聖』五木寛之『風に吹かれて』伊藤左千夫『野菊の墓』井上ひさし『ブンとフン』井上靖『あすなろ物語』井伏鱒二『黒い雨』遠藤周作『沈黙』大江健三郎『死者の奢り・飼育』大岡昇平『野火』開高健『パニック・裸の王様』梶井基次郎『檸檬』川端康成『雪国』北杜生『榆家の人びと』倉橋由美子『聖少女』小林秀雄『モオツアルト・無常という事』沢木耕太郎『一瞬の夏』椎名誠『新橋烏森口青春篇』塩野七生『コンスタンティ

ノープルの陥落』志賀直哉『小僧の神様・城の崎にて』司馬遼太郎『国盗り物語』島崎藤村『破戒』曾野綾子『太郎物語』高野悦子『二十歳の原点』竹山道雄『ビルマの豎琴』太宰治『人間失格』立原正秋『冬の旅』田辺聖子『新源氏物語』谷崎潤一郎『痴人の愛』筒井康隆『エディプスの恋人』壺井栄『二十四の瞳』中島敦『李陵・山月記』夏目漱石『こころ』新田次郎『孤高の人』野坂昭如『アメリカひじき・火垂るの墓』林芙美子『放浪記』樋口一葉『にごりえ・たけくらべ』福永武彦『草の花』藤原正彦『若き数学者のアメリカ』星新一『人民は弱し官吏は強し』堀辰雄『風立ちぬ・美しい村』松本清張『点と線』三浦綾子『塩狩峠』三浦哲郎『忍ぶ川』三木清『人生論ノート』三島由紀夫『金閣寺』水上勉『雁の寺・越前竹人形』宮沢賢治『銀河鉄道の夜』宮本輝『錦繡』武者小路実篤『友情』村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』森鷗外『山椒大夫・高瀬舟』柳田国男『遠野物語』山本周五郎『さぶ』山本有三『路傍の石』吉村昭『戦艦武蔵』吉行淳之介『砂の上の植物群』渡辺淳一『花埋み』

2. その他の用例

傍若無人な冷蔵庫『傍若無人な冷蔵庫』新井素子（1988）角川文庫
岳物語『岳物語』椎名誠（1989）集英社文庫
京舞妓『京舞妓殺人事件』山村美紗（1992）集英社文庫
見事な『見事な娘』源氏鶏太（1975）講談社文庫
銀ちゃん『銀ちゃんが、ゆく』つかこうへい（1988）角川文庫
悪女は四本のバラ『悪女は四本のバラ』青柳友子（1990）徳間文庫
見知らぬ顔の女『見知らぬ顔の女』草野唯雄（1984）角川文庫
公開株殺人事件『公開株殺人事件』清水一行（1989）角川文庫
深海の迷路『深海の迷路』森村誠一（1989）角川文庫
風紋『風紋』松本清張（1981）講談社文庫
ガラスの遊園地『ガラスの遊園地』景山民夫（1991）講談社文庫